

気になる指標

「景気動向指数」その3

CI（コンポジットインデックス）とは

前回に引き続き、内閣府の「景気動向指数」について解説する。景気動向指数には、景気の変化方向を示すDI（ディフュージョンインデックス）と、景気変動の大きさなどを表すCI（コンポジットインデックス）の2種類があることを紹介したが、今回はCIについて詳しく見てみたい。

CIは、主として景気変動の大きさやテンポ（量感）を測定する目的で開発された。わが国では、1984年から経済企画庁（現内閣府）がCIを公表しているが、いまだにその位置づけは参考指標にとどめられており、分かりやすさなどの点から現在でもDIが中心となっている。ちなみに米国では景気動向指数と言えばCIを指すほど注目度が高い。

CIは、景気動向指数で採用されている各指標の変化率を合成して求め、基準年（2000年）を100として指数化する。DIの算定方法（改善指標数の割合を単純計算）に比べるとやや複雑である。CIにもDIと同様、景気の先行きを示す先行指数、景気の現状を示す一致指数、景気に遅れて変化する遅行指数の3系列がある。一致指数CIが上昇している時は景気の拡張局面、逆に低下している時は後退局面と解釈する。また、DIだけでは区別がつかない「緩やかな景気回復」や「激しい景気後退」などのテンポを把握することが可能となる。

なお、CIの動向を見る場合には、当月の不規則な動きも含まれていることから、3カ月移動平均をとるなど、月々の動きをならして見るのが望ましい。

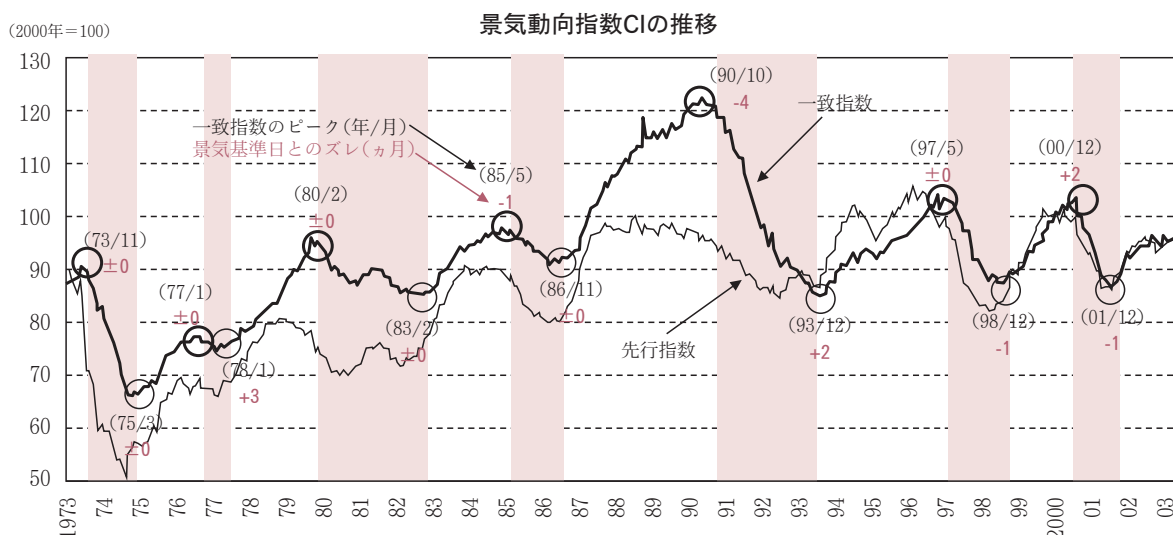
CIと景気基準日

景気の転換点、すなわち景気の山・谷は、一致指数の山・谷の近くに存在すると考えられている。実際に一致指数CIの山・谷と景気基準日の山・谷とを比較すると、1973年4月から現在までに出現した景気拡張期間のピークと一致指数CIの山は、7回のうち4回（73年11月、77年1月、80年2月、97年5月）まで一致。残り3回のうち、2回は一致指数CIが実際の山よりも先行（1ヵ月、4ヵ月）し、1回は遅行（2ヵ月）した。

一方、景気の谷については、7回のうち3回（75年3月、83年2月、86年11月）が一致し、残り4回のうち、2回は先行（各1ヵ月）し、2回は遅行（2ヵ月、3ヵ月）した。

一致指数CIの山・谷と景気基準日の山・谷とは、すべて符合するわけではないが、景気転換点の把握を目的にしなければ、便宜的にはCIで景気の変化方向と大きさの両方を把握することができよう。景気動向をより良く知るためには、DI、CIを相互補完しながら利用することが望ましい。

（木村 俊文）



内閣府「景気動向指数」より農中総研作成
 (注) シャドー部分は景気後退期を示す。